

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）

大学院学生研究

2 0 2 5 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			社会学研究科	社会学専攻
研究代表者 (2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏 名		
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 1 年		藤 杏子		
指導教員	所属部局・職名		氏 名		
	社会学部 教授		前田泰樹		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会		個人・共同の別	個人 ・ 共同 名	
研究課題	民間スポーツクラブにおける社会学的研究:ボクシングジムの相互行為に着目して				
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026 年 3 月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏 名		
研究期間	2 0 2 5 年度				
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。 本研究は、民間スポーツクラブにおいて「社交場」として機能する過程を、コーチ会員間および会員同士の相互行為の実践から明らかにする社会学的研究である。そのために、「社交場」として重要なジムでの休憩時間のふるまいと、練習から休憩に移行する際のコーチ会員および会員同士のやりとりに着目する。近年、スポーツジムは人間関係を形成する「社交場」として注目されている。しかし既存の文化社会学・スポーツ社会学では、このような場がいかに実践的に作り出されるのかは十分に明らかにされていない。そこで参加者の志向に即した分析が可能なエスノメソドロジー・会話分析の視点から分析し、スポーツ実践が社交の場として成立する具体的な方法を解明することを目的とする。
キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)
[スポーツ] [エスノメソドロジー] [趣味活動]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- 自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

本研究は、民間ボクシングジムを対象に、スポーツ実践がいかにして「社交場」として成立し、維持されているのかを、エスノメソドロロジー・会話分析(EMCA)の視点から明らかにすることを目的として行われた。近年、スポーツジムやフィットネス施設が「人間関係を形成する場」「社会参加の場」として注目されている一方で、そうした場が実際にはどのような相互行為的手続きによって「社交場」として達成されているのかについては、十分に解明されていない。本研究はこの点を、参加者の実践に即して記述することを課題とする。

本研究は枠組みとして、荒井(1984)が提唱した、ジムという場が競技をまさに行う「コート内」と、更衣室・待機スペースなど競技を行わない「コート外」の双方を含むことで近代スポーツとして成立するという主張を援用する。そのうえで、(1)コート内/コート外それぞれで参加者たちがいかなるふるまいを行い、(2)それらのふるまいがいかにして相互行為的に組織され、(3)結果として当該ジムが「社交場」として機能する条件がどのように達成されているのかを明らかにする。言い換えれば、コート内/コート外の双方における相互行為を具体的に記述し、その手続きが「居合わせること」「関係を保つこと」「参加を継続すること」を可能にしていると示した場合、本研究は「社交場」として機能する要素を解明したとみなす立場をとる。また、本報告における研究成果の根拠としては、次項「研究発表」に記載した業績のうち、学会発表・論文・掲載予定原稿など、外部に公表可能な形で提示できるものを中心に扱う。本年度は研究の結果、成果として以下4点を明らかにすることができた。

1. スポーツ実践そのものを相互行為として捉える手段として、エスノメソドロロジーの枠組みが有効であることの提示

これまでスポーツ社会学におけるエスノメソドロロジー研究は、実況中継やスポーツメディアの言語データに依拠した分析が中心であった。渡(2025)が放送大学教材として執筆した『スポーツ社会学』においても、エスノメソドロロジーは主として実況場面の分析への貢献が記載される。さらに、ボクシング実践を扱った相互行為研究としては、近年ではOkada(2025)が言語学分野と接続しつつ、コーチとボクサーの「指示—実行」場面に着目している。

しかし一方で、ボクシングジムの現場には、指示—実行の連鎖だけでは捉えきれない相互行為が数多く存在する。たとえば、練習の合間に生起する評価・談笑・視線による合図・他者の参加を促す働きかけ等は、技術獲得の局面にとどまらず、場の雰囲気や参加のしやすさ、成員性の維持に関与している。本研究は、こうした「指示—実行」以外の実践に着目し、それらもジムが「社交場」として成り立つための要素になっているという見通しを提示した。

このような見通しは存在するものの、スポーツ実践そのもの(現場の相互行為)を正面から対象化した研究は未だ多くない。そのため、本研究の方法論的意義を示すには、過去のエスノメソドロロジー研究の蓄積を再検討し、スポーツ研究における適用可能性を整理したうえで提示する作業が必要となる。そこで申請者は、スポーツ社会学者やスポーツ関係者が広く参照する『現代スポーツ評論』において研究紹介として海外のエスノメソドロロジー文献を平易に整理し、スポーツ実践研究にとっての意義を示した(業績2)。あわせて、大学院生など若手研究者が多く読むANRI人文奨学金の媒体においても、同様の内容を専門用語を抑えた形で説明し、方法論的射程を提示した(業績3)。

2. 社交場が成立するための行為として、コーチによる「適切な評価(褒め)」が存在すること、ならびにその方法(コート内)

報告者はフィールドに週4回以上通い、参与観察を継続した。そのなかで、ジムが社交場として機能する契機となる行為として、コーチが会員のパンチを「褒める/評価する」実践が重要であることを見いだした。ただしこの「褒め」は任意のタイミングで付与されるものではなく、適切なタイミング・適切な褒め方(言い回し、身体の配置、次の行為へのつなげ方)を伴って組織されていた。すなわち、評価は単なる感想ではなく、練習を中断させず、かつ練習の継続可能性を高めるように設計された相互行為である。

先行研究では「褒め=評価」と捉えたうえで、その方法が言語形式やターン交替、応答の組織に表れることが示されている。本研究はこうした視点から、日本社会学会および会話分析研究会において「ボクシングジムでどのようにパンチの評価が適切に遂行されているのか」を報告した(業績6・7)。

分析の結果、スポーツ特有の触覚資源(パンチとミットの接触)が、発話の中でオノマトペとして取り込まれ、それが解釈を伴う言葉へと段階的にアップグレードされることで評価の根拠が構築されることが明らかになった。また、評価を受け取る側も、それに応答する身体動作(フォームの再現、ミットへの打ち

研究成果の概要 (つづき)

直し、姿勢の調整等)を用いて理解を示し、評価が相互行為として達成されていることが確認された。

このように、ボクシングジムにおける練習場面の分析から、社交が成立する重要な実践としてコーチによる「褒め(評価)」が機能していることを明らかにした。とくにパンチという可視化されない物理的な力によって発生する評価が難しい行為を、オノマトペ・身体動作・触覚的資源などを用いて可視化しつつ評価する実践が確認された。こうした評価実践は、会員が練習に参加し続けるための相互行為的基盤を形成すると同時に、ジム内での関係形成(参加しやすさ、承認、居場所感)にも寄与していると考えられる。なお、この成果は高校生のサポート校である Loohecs 高等学院において特別授業としても共有し、身体的実践を卒業論文執筆などで取り扱う高校生に対して研究事例として共有している(業績 8)。

3. 社交が成立するための行為として、コーチーボクサーー第三者を含む「スモールトーク(雑談)」が存在すること、ならびにその方法(コート外)

スポーツクラブが社交場として機能するうえで、雑談(スモールトーク)は中核的な実践である。とくに、趣味として参加するスポーツでは、競技能力の向上だけが参加理由の全てではなく、会話やコミュニケーションを求めてジムに来る人が存在することが指摘されている(杉山・執行 2024)。その一方で、同じ空間にはプロ選手も共在しており、目的や参加様式の異なる人々が同じ場に居合わせる。このように異質な参加者が混在する場において、練習中に練習を差し置いて雑談が優先される局面が生じることは、競技よりも社交が優先されうることを示す経験的な手がかりとなる。

ただし、ボクシングの場合、リング上での雑談は原則として禁止されているため、雑談は無造作に始められるのではなく、一定の相互行為の手続きによって慎重に導入される。

本研究は、雑談が開始される際に人々がどのような資源(視線、身体の向き、声量、宛先指定、笑いの配置など)を用い、どのように第三者を巻き込みながら参与構造を拡張していくのかを分析し、その技法を明らかにした(業績 7)。分析の結果、コーチ側の視線や身体配置が雑談開始の契機として機能していること、とりわけ雑談が「ジムという共同体」を維持する役割(相互の認知、関係の更新、場の空気の調整)を担っていることが示された。また会員側は、練習と雑談を両立させるために「ながら行為」として会話を組織し、練習からの逸脱が最小化されるよう調整していることが確認された。すなわち、雑談は単なる余談ではなく、練習秩序を壊さずに社交性を成立させる実践として編成されていた。

4. 社交を成立させる競技特性の検討、およびジェンダー研究への接続

最後に、社交を成立させる競技特性を検討するため、「なぜその競技を選んだのか」という観点から女子ボクシング選手の語りを分析した(業績 1)。本稿では、女子ボクシング選手のスポーツ種目選択とキャリア形成を、インタビューにおける語りの相互行為的実践として分析し、その過程で性別カテゴリーがどのように運用されるのかを明らかにすることを目的とした。競技特性については個人スポーツであることや過去の連続したスポーツで必要とされる身体の動きの連動の中で選手が認識していたことが明らかにされた。さらに、性別カテゴリーは競技選択の主たる理由として前景化するわけではないものの、競技上の有利さを判断する資源として用いられる一方、練習場面、とりわけスパーリングでは男性と対等に扱われない経験に関連して前景化することが明らかになった。

以上より、女子ボクサーの競技選択は単に個人の志向や社会構造のみで説明されるのではなく、過去のスポーツ経験、競技特性、そして相互行為のなかで運用されるカテゴリーとの関係のなかで理解される必要があることが示唆された。

<参考文献>

- 荒井貞光. "スポーツ集団の空間構成に関する社会学的考察:「コートの中」「コートの外」 概念に着目して." *体育学研究* 29.1 (1984): 1-13.
- 杉山昂平, and 執行治平. "民間卓球コーチにおける顧客興味に依拠したレッスンの遂行方略." *日本教育工学会論文誌* 48.1 (2024): 29-41.
- 渡正. "スポーツ社会学." *放送大学教育振興会*, (2025)
- Okada, Misao. "Japanese turn-initial particle hai in instruction-compliance sequences in boxing." *Interactional Linguistics* 5.1-2 (2025): 127-166.

※この(様式 2)に記入の成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

<① 雑誌論文>

1. 藤杏子(2026)「女性アスリート選手のスポーツ種目選択と性別カテゴリーの運用——女子ボクシング選手を事例に」立教大学ジェンダーフォーラム年報, (27):21-32.

<② 図書>

2. 藤杏子:「スポーツ実践とエスノメソドロジー」現代スポーツ評論(発行予定)
3. 藤杏子:「うちのジムでは毎朝コーヒーを入れる」ANRI 人文奨学金 ZINE(5月発行予定)

<③ シンポジウム・公開講演等の開催>

4. 藤杏子:「スポーツ社会学は何をしてきたのか——あなたの語りから」スポーツ社会学会シンポジウム, 2026.3.15(東京)

<④ その他(学会発表、口頭発表)>

5. 藤杏子:「ボクシングジムにおける練習中の相互行為」スポーツ社会学会, 2026.3.15(東京)
6. 藤杏子:「ボクシングジムにおける相互行為——力の可視化」日本社会学会, 2025.11.6(東京)
7. 藤杏子:「パンチの評価実践——ボクシングジムでの練習場面より」会話分析研究会, 2025.8.20(北海道)
8. 藤杏子:「ボクシングジムにおける『楽しむ』実践」Loohcs 高等学院特別授業, 2025.11.26(東京)